

「音楽とアートでつづるおうみの民話」レビュー

「これは願ってもないチャンスや」。縁あって本事業にかかわる機会を得た私の率直な感想である。私は甲賀市で文化財や博物館の仕事をしており、特に最近、民具（人びとが生活や仕事のなかで使ってきた道具・用具）の保存と活用に力を入れている。スズ・シアター・ミュージアム（石川県）や油谷コレクション（秋田県）などの動向に触れ、以前からアートとのコラボレーションに強い関心をもってはいたものの、なかなかつながりをつくることができずにいた。そうした折にひょんなことからお声がけをいただき、それが冒頭の言葉につながる。

夏の気配を感じる6月末のある日。野田幸江さん（現代美術家）、（公財）びわ湖芸術文化財団の職員の方との最初の打合せをおこなった。民話「大蟹とお坊さん」を中心的な題材としつつ、地域で“伝えられてきたもの”をリサーチし、音楽やアートを制作するという。とりわけコンサートの舞台美術となる作品づくりのワークショップへの協力を求められたので、制作の手がかりとして地域で伝えられてきた民具のかたちを紹介してみてもどうかと提案した。

私も全2回のワークショップに参加し、地域の子どもたちや協力者の皆さんとともにリサーチと作品づくりに取り組んだ。さまざまな視点から民話や地域の歴史文化を捉えつつ、それらを作品にしていく過程はとてもおもしろく、いくつもの学びや気づきを得た。かにが坂飴づくり体験や試食などもあり、原材料となる水飴の感触や甘いにおい、優しく素朴な味わいは参加者全員の心に残った。また、皆さんが民具に関心を寄せ、多くの作品にそのかたちが取り入れられたことは素直にうれしく思った。

コンサートでは、完成した作品が舞台美術としてステージを彩るなか、新作「大蟹とお坊さん」（作曲：首藤健太郎、脚本：カノチヒロ）が初演され、ホールのロビーでも作品や民具などの展示がおこなわれた。さらに翌年1月末からは、甲賀市土山歴史民俗資料館で連携企画展が開催され、ワークショップからコンサート、展示までのおよそ半年間を通じて、民話の世界や、地域で“伝えられてきたもの”を五感で体感する稀有な経験となった。

民話などの地域文化は、多様な方法や関係性のなかで、時には変化を伴いつつ伝えられてきたものであり、本事業もそうした流れのなかに位置づけることができよう。とりわけ現在の地域社会における文化継承の難しさに鑑みると、私は本事業に大きな可能性を感じずにはいられない。

本事業は多様なアートの手法や視点を意識的に取り入れることで、地域の人たちに自らの文化の再認識をもたらし、継承への活力を生み出すものになっている。また、事業を進めるなかで地域のヒト・モノ・コトの新たな関係性を取り結ぶことにも成功しており、これは将来の文化継承の上で大変重要なことである。

最初は民具という一点からのかかわりであったが、本事業を通して得た知見は、文化財や博物館の仕事全般にわたって示唆に富むものばかりであった。滋賀県内で文化財行政や博物館に携わる仲間たちにも本事業のことを伝え、参画を促していきたい。

甲賀市教育委員会事務局歴史文化財課 主査（学芸員）佐野 正晴

参考

○スズ・シアター・ミュージアム (<https://www.suzu-stm.jp/index.html>)

○東京文化財研究所 | 民具の魅力を語る3 民具×アート | 油谷コレクション
(<https://www.tobunken.go.jp/ich/research/mingu/interview/3arts/>)

以上